

プラグマティズムと最高善

—— パースの後期哲学をめぐる ——

高 見 保 則

パースは、プラグマティズムの創始者として、またソシュールと並び称される現代的な記号学の祖として、あるいは記号論理学への貢献から、等の様々の角度からその哲学の独創性を認められてきた。しかし彼の哲学の全体像を鮮明に浮かび上がらせるには、多くの困難が伴っている。生涯大学に地位を得られず孤独のうちに知的活動を続け、同一のテーマについて何度も修正を重ね、しかも難解な用語を多用しているといった副次的原因以外に、彼の哲学に根本的に矛盾する二つの傾向、つまり経験主義的傾向と形而上学的傾向が併在している事実が指摘されてきている⁽¹⁾。

このうち形而上学的傾向はパースの後期哲学において際立ってくるが、これを経験主義との連続性で評価するか、全く異質で相互に矛盾する要素としてみるかは、パース哲学を評価する上での分水嶺となろう。それはここで扱おうとするプラグマティズムの見方にも係わってくる。例えばパースの経験主義的側面を重視したバクラーは、後期のプラグマティズムが「倫理学と形而上学の理論」⁽²⁾になったことを否定的にみている。しかしプラグマティズムが形而上学的論争を終結させるために考案された経緯を考慮すると、後期において伝統的な形而上学が復活されたとは考えにくい。少なくともパース自身においては、実験主義の哲学的適用と「関係論理学」的な分析によって、経験主義、自然主義の枠内に収まりきらぬ要素が確認されたことを意味する。

ここではプラグマティズム概念の前期から後期⁽³⁾への展開の論理的脈絡を究明し、パースの後期哲学において顕著になる形而上学的傾向が、如何なる意義をもつかを探る手掛りとしたい。それでまず前期プラグマティズムの意味を考察し、そこに含まれる如何なる内在的要因が後期への展開を導いたか、さらにはそうした要因の自覚がプラグマティズムの根本原理の反省と結びつきなせ最高善が要請されるの

かを解明する。それを踏まえた上で、後期の体系化への志向のもとでプラグマティズムと最高善がどのように関係づけられるかを検討していくことにする。

1

「プラグマティズム」は、通俗的に功利主義との類縁性を予想させる「実用主義」と訳されたり、あるいは思考を行動に還元する理論と解されたりしている。確かに一つの思想運動としてプラグマティズムを眺めた場合、このような解釈を必ずしも全面的には否定しえない。しかしこのことはパースにとって、不幸なことであった。彼が最初にプラグマティズムを考案したときに抱いていた企図は、実験主義的な精神に基づいて、従来の哲学概念を洗い直し明晰化をはかることにあった。従って結果とか行動という概念が使用されても、それは想定された実験結果、実験行動との類比で論じられるのであって、結果を功利主義的に評価したり、現実的な行動に思考の意味を求めたりするのは、パースの真意に反する。

この実験主義の哲学への適用がパースの哲学の基調をなすことは、「信念の固め方」という論文で、固執(tenacity)の方法、権威の方法、ア・プリオリの方法、科学の方法を逐次論じて、科学的探究の方法つまり実験的方法の優越性を説いている点からも、その一端が読み取れる(5.377一)。⁽⁴⁾しかしここには実験概念の大幅な拡張があり、またそうでなければ科学的探究との連関で哲学的概念を再構成することは不可能であろう。議論を先取りして言えば、この拡張に含まれる問題性が顕在化する地点に、パースの形而上学的な主張が生まれてくると考えられる。

さてプラグマティズムが格率として最初に定式化されたのは、「概念を明晰にする方法」においてである。既にデカルトやライプニッツに概念の明晰さと判明さについての説があるにもかかわらず、パースは概念とのなじみ(familiarity)による第一段階の明晰さ、及び概念の定義による第二段階の明晰さを超えたより高度な第三段階の明晰さを主張する。というのも第一段階の明晰さは主観的な明晰さにすぎず、第二段階の明晰さも概念をより抽象的な別の概念で形式的に定義するだけでは、ともに形而上学的な論争の真の解決をもたらさないからである。

第三段階の明晰さを得る方法としてのプラグマティズムの格率を、パースは次のように定式化した。「我々の概念の対象が、行動に関係するかもしれぬと考えられるどのような影響をもつと我々は考えるか、を考察せよ。そうすれば、これらの影

響についての我々の概念が、その対象の概念のすべてである」(5.402)。

“Consider what effects, that might conceivably have practical bearings, we conceive the object of our conception to have. Then, our conception of these effects is the whole of our conception of the object.”

この格率だけ取上げても非常に難解で、それ自体明晰な定式だとは言えないが、すぐ後に例えば「硬い」という概念は多くの物で引っ掻いても傷がつかないという意味で解されると、格率の適用例が示されているからほぼパースの意図は推察しうる。つまり概念を抽象度の高い概念で定義する明晰化の方向とは逆に、概念を探究行動とその結果に係わらせて、経験へと開かれた意味の明晰化を図ろうとしたものと考えられる。ここでの探究とは、もちろん権威や主観的信念に訴える方法ではなく、科学的、論理的方法に基づく探究であるが、プラグマティズムはこうした探究との係わりで意味を本質的に明晰化しえない概念を追放し、また探究過程に同じ影響あるいは結果を残すと考えられるものは、二つの違った概念でも一つ概念とみなすことから、オッカムの剃刀の機能を果たすとも言える。

こうしてプラグマティズムの根底には探究概念が存すると考えられるが、パースは前期において精確ではないと留保をつけながらも、探究を次のように捉えている。「疑い (doubt) の刺激が信念 (belief) の状態に達する努力を引き起こす。この努力を私は探究 (Inquiry) と名づけよう」(5.374)。探究の端初を疑い、探究の目標を信念とするのは、たんなる心理学的な観点による意識状態の記述でしかないようにみえるが、パースは疑いと信念にそれ以上の事柄を含意させていた。

科学的な探究を哲学の方法のモデルとパースは考えたが、その場合疑いは既成の信念体系と合致しない経験からいわば強制されて生じ、我々が疑おうとして疑うのではない。即ち疑いは何らかの客観的な裏づけのある積極的理由を伴っている。それ故パースは「哲学において、心の中では疑っていないことを疑っているふりをするのはやめよう」(5.264)と提案する。これは明らかにデカルト的懐疑を念頭に置き、方法的懐疑が真の疑いであることを否定しようとしたものである。パースは偏見が徹底的な懐疑の方法によって除去しようということを信じなかった。むしろ探究の出発点は偏見を含んだ常識からであり、その常識を論理的方法に従って批判し正しい信念の方向へ変えていく過程が探究なのである。パースはこの立場を「批判的常識主義」(critical common-sensism)と後に呼ぶようになるが、それは科学

的探究の、問題（疑い）→仮説→検証の反復による自己修正過程を範としている。こうしてプラグマティズムにおいては、疑いはそれまでの信念を揺るがし、説明的な仮説形成を促して探究を推進する力を有し、たんに頭の中で形づくられたものではない実在的な性格をもつ。

同様に信念に関しても、ただ問題が解決して心に安定した状態が生まれるという事実を示すだけではなく、行動との結びつきで捉えられている点に注意しなければならない。一般にプラグマティズムは思考を行動の一環とみる立場であるが、パースの場合微妙な区別があり単純に思考と行動を直接結びつけているわけではない。彼は思考と行動の関係を、信念を媒介にして次のような脈絡で捉えている。思考の目的は信念の産出であり、その限りで思考は一つの探究過程である。ところで思考によって確立される信念の本質は、我々のうちに行動の規則を形成する点にある。換言すれば信念とはそれに従って行動する態勢ができることを意味する。パースはこの行動の規則あるいは行動態勢を習慣と呼ぶが、この習慣概念はかなり特異なものであって、例えば「ダイヤモンドは硬い」という信念は、「ダイヤモンドを多くのもので引っ掻いても傷がつかない」といった操作的行動とその結果から成る条件文の形式で理解され、それが未来にわたって一般的に成立するという意味で習慣と呼ばれる。このような習慣概念によってパースは信念が主観的な心の状態ではなく、客観的な基礎を有することを説明しようとしたものと思われる。

これまでパースの前期におけるプラグマティズムの概念を後期への展開を視野に入れながら述べてきたが、前期の理論それ自体を取ってみると多くの誤解される要素を含んでいる。まず格率に「影響」(effects)という言葉が使用されており、これは概念の意味を、実験的行動の結果得られる感覚的な影響もしくは結果に求める検証理論として解され易い。さらにはパースが行動に言及する場合、専ら行動の規則や行動の様式を指しており、現実の行動のために思考を手段とみなす立場とは全く相いれない。影響にしても行動にしても、習慣という一般的な行動規則の中で、さらにはこの習慣も科学的な探究の連続性の枠内で論じられている。しかし思想運動としての「プラグマティズムはパースの化学実験室から遠く外側の領域に侵入」⁽⁵⁾し、宗教や道徳の哲学にまでなる。この展開はパースが概念の意味を知的意味に限定したのに対して、それを突破して情緒的意味、行動的意味にまで拡大したところに起こった。適用領域を拡大したために知的厳密性を失ったプラグマティズムを本

来の軌道から外れたものとみて、それを契機にパースは後期においてプラグマティズムの原理的反省を行なう。

第一の方向は、それが情緒的満足であれ具体的問題状況の解決であれ、現実的結果の功利的評価の基盤に、唯名論的立場を見出し、それに対立する实在論を徹底化することである。ここで唯名論といわれるのは、個別的な結果を重視し、一般的なものをそうした結果を実現する道具とみる立場である。パースは上のような功利的評価の探究理論における等価物を、仮説が知的仮構であり検証事実を唯一の实在とする考え方に求めている。こうした唯名論的傾向を根本から排除し、一般性の实在を主張する实在論的立場からプラグマティズムを基礎づけようとするのが、パースの一貫した態度であり、後期においてさらにその立場が徹底されるわけである。

第二の方向は、プラグマティズムの心理学的解釈を退けることである。前期の理論では疑い、信念、習慣等の心理学的用語が使用され、パース自身も心理学的説明を援用しているため、そうした解釈をある程度容れる余地があったと考えてよい。後期では探究理論の論理的分析を遂行し、同時に体系化の中でプラグマティズムがアブダクションの論理として新たに位置づけられるようになる。

こうしたプラグマティズムを巡る理論的反省がともに最高善の要請へと導く論理展開を、以下ではまず实在論の観点から、次に探究の論理的分析の観点から明らかにしてみたい。

2

实在論の重要性が一貫して主張されているにもかかわらず、その明晰な記述がパースの著作に見出せないとバクラーは指適しているが⁽⁶⁾、確かにパースの实在論を考察しようとすれば彼が主に依拠しているドゥンス＝スコトゥスの实在論との比較検討を通して、断片的な記述を統一的に解釈する作業が必要となろう⁽⁷⁾。しかしここでは实在論がプラグマティズムに対して持つ意味に限定して論じていくことにする。

パースは1905年頃のものとは推定される書簡の中で、「ダイヤモンドが圧迫されなくても硬いと言うか、圧迫されるまで軟らかいと言うかは、言葉の便宜の問題にすぎない」とした前期における唯名論的傾向を修正し、「実証的事実としてダイヤモンドが硬いことが、実験によって証明されるであろう」と述べている(8.208)。

この移行は探究過程において、圧迫するという検証のための行動を重視する立場から、圧迫すればそれに耐えるであろう (would) という、未来の一般的な存在様式の証明へと強調点が移ったことを意味する。つまり特定の実験の結果が、未来の同じ条件のもとでも生起するという意味での一般的予測が成立するとすれば、その一般性はたんなる知的な仮構とみることとはできない。パースの論点は、一般性の実在を前提しない限り、予測の一般性を原理的に説明しえないということである。

既に探究理論における習慣概念について簡単に触れたが、後期において概念の意味がはっきりと習慣に求められるようになる事情は、この予測の一般性との関連で理解されなければならない。プラグマティズムの方法に従えば、概念は「もし……ならば、——であろう」という仮言命題の形式に置換されて意味の明晰化がはかられる。この場合意味は特定の経験にあるのではなく、未来における経験の一般的な可能性にある。そうした可能性が実在し検証されうることを理論的に説明するために、パースは習慣の概念に訴えたものと思われる。彼が特に注目した習慣の特徴は、一般性 (generality) と条件性 (conditionality) ということで、未来において一定の条件もとで生起する行動への態勢としての習慣は、既にそのうちに予測の一般性を内在化している。

さて以上からパースの実在概念が未来への射程を含んだものであることが看取されるが、こうした捉え方の基軸はカテゴリー論⁽⁸⁾にあると考えられる。後に最高善を扱う箇所でも、しばしばカテゴリーに言及することになるので、ここで大筋にだけ触れておく。パースは後期に現象学的分析によって、他のものに還元しえない、現象の普遍的構成要素つまりカテゴリーを導出している。第一のカテゴリー (第一性 Firstness) は情感の質 (Quality of Feeling)、第二のカテゴリー (第二性 Secondness) は反作用 (Reaction)、第三のカテゴリー (第三性 Thirdness) は表示 (Representation) である (5.66)。これらの三つのカテゴリーは様々な領域に適用されているが、特にここで注目したいのは実在論との係わりで、第二性が存在 (existence)、第三性が実在 (reality) とされている点である。

パースは「存在は盲目的圧力 (blind force) の事柄である」(1.329) と規定し、外界との接触に際して生ずる反作用のうちに与えられるものと捉えている。しかしそれによって外界についての知識が与えられるわけではなく、今ここにあること (haecceity) という性質を持つ第二性は、一般性を欠き非概念的なものであって

「盲目的压力」にととまる。それが知識の事柄となるには、それを表象する (represent) 作用 (第三性) の媒介を必要とする⁽⁹⁾。パースの実在概念の根本特徴は実在を第三性つまり知識の事柄とすることによって、知識の実在的な対象を連続的な探究が収斂していく究極的な意見によって表示される対象とした点にある (5.407)。このような意味で同じ第三性に属するとされる習慣や法則は現実には存在する (exist) のではなく、実在的 (real) なものなのである。

ところでこの実在論をプラグマティズムも関連させてみると、例えばある物が硬いということはそれが一定の習慣あるいは法則に従うと解され、この習慣あるいは法則の実在は連続的な探究が最終的に帰着する目標として措定される。実在が探究の最終目標とされることで確かに実在するものは原理的に可知的であり、究極的に不可知なものは排除されるが、最終目標としての実在は実際には不可知な性格をもち、知識の根底に不可知的なものを置く点では同じである。この結論を避けるには連続的な探究が一定の結論に収斂していくという保証が与えられねばならない。その保証がなければ一般性の実在を前提とする概念の明晰化は無意味であろう。しかし実在が探究の最終目標とされる限り、到達可能な目標の実在の証明は探究過程の内部ではなされえない。結局パースにとって実在の問題は究極目標としての最高善の要請へと向かわざるをえなかったものと想定される。

3

これまで実在論の徹底化から最高善の概念の要請へとつながっていく要因を考察してきたわけだが、パースの後期における探究の論理的な分析に関しても同じ種類の問題が存する。パースは従来の演繹、帰納という推論形式以外に、仮説構成の論理としてのアブダクションを明確な形に定式化し、次第にそれらを探究の三段階、即ちアブダクションによって説明的な仮説を構成し、演繹によって仮説の示唆から予測を引き出し、帰納によってその予測をテストするという三段階として位置づけるようになる。前期において「概念を明晰にする方法」であったプラグマティズムは、探究との係わりで意味を明晰にしえない概念を取り除くことに重点があったが、後期においてアブダクションの論理とされ観察された事実の明晰な意味、つまり妥当な仮説を発見する役割を担われる。ここには明らかにプラグマティズムの概念の拡張が認められるが、恐らく前期で意味の明晰化の基礎にあった探究概念そのも

の論理的反省によって、探究過程における曖昧な要素を排除する問題が重要性を帯びてきたからであろう。

探究の三段階で、演繹および検証結果の一般化の論理としての帰納においては、誤りを犯すことはあっても明晰化を必要とはしない。説明仮説として新しい発想を産み出すアブダクションにおいてのみ、プラグマティズムの方法による明晰化、つまり仮説を実験的な検証可能性によって明晰なものにする必要を生じるのである。このことをパースはプラグマティズムが帰納には干渉せず、演繹には許容しうる仮説を限定する点でその前提を切りつめる影響を及ぼすがその論理には影響せず、結局許容されうる仮説をどれも切り捨てることをしないからアブダクションの論理とみなせるとしている(5.196)。(10)

さてアブダクションの唯一の正当化は、そこから演繹によって予測が引き出され、その予測が帰納によって検証されうる点にある。もしある仮説が検証によって退けられれば、さらに別の仮説が立てられる。可能性としては仮説の数は無数であるが、実際の探究においてはそれらを逐一検討しなくても一定限度の推論で真なる説明を思いつくと考えられている。これは我々が既にアブダクションにおいて、事実に合理的な説明が与えられうることを前提しているからである。しかしこの事実の合理化可能性自体が一つのアブダクションであり、しかも實在論の箇所であつた探究が収斂していく究極目標の實在によってのみ正当化しうるアブダクションである。

こうしてパースにおいて實在論の徹底化もプラグマティズムをアブダクションの論理と規定することも、ともに究極目標によって根拠を与えられる。究極目標自体は前もって確定されないために、ヘーゲルを彷彿させる世界の合理化の過程が最高善として要請されたというのが、恐らくはプラグマティズムと最高善の關係の隠された論理的脈絡であろう。パースが実際にプラグマティズムの最高善による基礎づけを論じているのは規範学論においてである。以上の考察を足場にして最高善が正面からテーマとされる規範学論の検討に移ろう。

4

後期においてパースは哲学の体系化の構想を練り、それに輪郭を与えるために学問の分類を試みている(1.180 ff)。この分類はカテゴリーによる三分法と上位の学問が下位の学問にその原理を提供するという関係を組み合わせてなされており、

哲学だけを見ると次のように分類されている。



この図で最高善の決定に携わる美学が倫理学を、さらに倫理学が論理学を基礎づけるというのが規範学⁽¹¹⁾の構造になっている。この基礎づけ関係の意味を考察していくには、まず規範学の特徴に留意しなければならない。上の図で規範学の上位にある現象学は既に触れたように、実在するか否かにかかわらず、現象の普遍的構成要素を分析しカテゴリーを導出する学問であった。その意味で現象学は現象そのものを他と関連なしにその第一性において扱う。それに対して規範学は現象と目的の二項関係、つまり第二性を扱う。規範学での善悪の規準は現象が目的実現へと導くか否かということであろう。規範学の分類もまたカテゴリーに基づいており、情感 (feeling) — 第一性に係わる美学、行動 (action) — 第二性に係わる倫理学、思考 (thought) — 第三性に係わる論理学に分けられる。

パースはこれらの三つの学問の目指すものを美的善、倫理的善、論理的善と呼んでいるが、まず論理学について言えば、善悪が問題とされるのは「自己統制的、あるいは熟慮の思考」(1. 191)のみである。論理学の倫理学による基礎づけは、自己統制的な思考が自己統制的な行為つまり道徳的行為の特殊例であるという理由でなされるが、こうした観点へ導いたのはむしろプラグマティズム固有の思考の見方にある。思考の目的は信念の確立、即ち習慣⁽¹²⁾の確立であった。習慣はパースにおいては条件性をもつという点で自己統制的な行動の態勢化である。そこで自己統制的行動一般に係わる倫理学が論理学の上位の学ということになる。しかし基礎づけ関係という場合パースが特に重視しているのは倫理学が論理学に対して、自己統制的思考を可能ならしめる目的を与える点である。

倫理学は、「純粋に理論的な学問のうちでもまさに最も純粋に理論的な学問」(1. 282)である規範学の第二の学と位置づけられ、デューイの倫理学とは対照的である。デューイの倫理学の基礎にあるのは、理論と実践の架橋であり、従って具体的な実践の場に起こる問題の解決に最も有効な手段として科学的態度が要請される。それに対してパースは理論的厳密性を保持するため理論と実践を峻別し、倫理学の主題を行為を導き行為を正しいものにする目的そのものの考察にあるとする。「倫

理学は我々が熟慮の末、いかなる行動の目的を採用する用意があるかについての研究である」(5.130)。

勿論、パースは実践を全く無視したわけではない。倫理学は自己統制的な行動に関する学であり、絶えざる自己批判による行動の統制が結局目的の問題に達着するからこそ、諸目的の考察が重要になる。「1903年のローウェル講義」でパースは目的を理想と言い換えて、行為の批判の段階を述べている。第一は自己の行為が自己の決意に一致したかどうか、第二は自己の一般的意図に一致したかどうか、第三は自己の理想に一致したかどうかである。こうした行為の自己批判よりさらに高い段階は自己の理想そのものを批判することであり、最後には純粹に理論的考察である行為の理想の問題にぶつかる(1.596-600)。

このような理想あるいは目的の学である倫理学が究極目標である最高善を与える美学に基礎づけられるというのがパースの主張だが、美学の存在理由はそれほど明確ではない。倫理学における諸目的の考察は、結局いかなる状況にも係わりなく追求されるべき究極目標についての問いに導く。これがなぜ美学によってしか解決できないのであろうか。確かに行為と関係づけられることなく、それ自体で賞賛すべき(admirable)ものを美学は対象にするが、一般に倫理学でも手段と切り離れた目的自体としての善を重要なテーマとする場合が多い。それにもかかわらずパースが倫理学を美学によって基礎づけようとしたのは、ギリシャ的な「善美」(καλοκάγαθία)という概念が念頭にあり、倫理化と美学を一体化する傾向があったからだと思われる。パースは行為の理想が受け入れられる理由として、第一に行為自体が美的質をもち、第二に行為の理想が相互に一貫性をもち、第三にそれらの理想を十分に実現した結果が美的質をもつことを挙げている(1.591)。第二の理想間の一貫性というのもある意味では調和的全体が美的質をもつと言えるとすれば、倫理学における行為の理想あるいは目的は、美学的評価に基礎づけられることになる。とはいえパースの美学説がほとんど展開されておらず、倫理学の概念も時期によって食い違い一義的な決定をみなかったこともあり、倫理学と美学の関係、従って規範学全体の構図そのものが、明確な形で提示されているとは言い難い。

既に倫理学が目的の学であることを述べたが、パースがそれについてどのような

構想を抱いていたかは、ごくわずかの断片から推測できるにすぎない。確実に言えることはパースが手がけた他の学問領域と同じく、カテゴリーの適用によって目的を分類しようとしたことである。この分類に関しては、ほんのメモ程度のものが残されているだけだが(1. 589)、最高善の考察に重要であると思われる限りで、他の箇所と関連させながら触れておきたい。

第一のカテゴリーは情感の質で、これに基づく目的は特定の情感の質、例えば快を生じさせることになる。パースにとっては快楽主義の批判よりも、プラグマティズムが快楽主義であるという非難を退けることが急務であった。つまり規範学の基礎づけ関係をみると、論理学は倫理学に、倫理学は美学に基礎づけられ、論理学においてアブダクションの論理として位置づけられたプラグマティズムは、最終的には第一性の情感を扱う美学に依拠することになる。それ故プラグマティズムは、結局快を追求する立場ではないかという反論が予想される。これに対してパースは、快苦という現象を主に情感の現象とみることに、疑問を投げかける。結論的に、快苦のすべての現象に共通する快あるいは苦といった情感の質は認められず、苦の状態のときにはその状態を静める努力即ち第二性の要素が優越し、快の状態のときは、認知的な要素である第二性が主要部分となるというのである。ただしここでの快は低級な快ではなく、パースが美学で問題にしている美的享受 (esthetic enjoyment) であり、その場合の情感というのは「一種の知的共感」であり「合理的な情感」(5. 114)なのである。とすれば美学は情感に係わるといっても、実はそうした第一性としての情感を表示する (represent) 第三性が本来的対象となる。

こうした見方はパースの思考法の典型的なパターンである。美学においては、情感の質 (第一性) そのものは統制しえないが、それを表示する認知的要素 (第三性) は批判によって改善されると考えられ、それ故にこそ情感 (第一性) の習慣 (第三性) が理想として措定される。ただし情感の習慣は、最も成熟した美的享受者にしか見出せないものである。また倫理学においても、たんなる環境に対する反作用としての現実化した行動 (第二性) は統制しえないが、目的によって導かれた統制可能な行為 (第三性) は道徳的完成へと向かうのである。ここでも行動 (第二性) の習慣 (第三性) が語られ、探究において自己修正を重ねながら習慣形成へと収斂していく過程がモデルとされていると考えられる。

さてプラグマティズムが美学に最終的に依拠しながらも、それは第一性としての

情感の質に訴えるのではないことを明らかにした。第二のカテゴリーに基づく目的は「主体の存在 (existence) を拡張すること」(1. 589) とされるが、当然これも第二性として現実に存在するものを維持するための合理的な根拠は与えられない。結局第三性のカテゴリーに属する一般的理想の実現が最高善の候補として残るわけである。パースはさらに一般的理想の実現を目的とするものを6種類に分類しているけれども、ここでは最後の最高善に相当すると思われる目的の規定のみをみておきたい。それは第三性に基づく目的の中でも一層第三性の要素が卓越した目的であり、「長い目でみれば (in the long run) 自己を実現する傾向にあるものとしてしか、前もって定義しえない理想の実現を促進すること」(1. 589) とされ、かつその理想は内的実現、外的実現がともに可能であると規定される。

この最高善の規定についてそれ以上の説明が与えられていないので、他の箇所を参照するしかないが、ちょうどパースは「プラグマティズム講義」の中で内的実現、外的実現に対応すると思われる二つの条件に関して述べている。最高善たる究極目標は、それが究極的であるが故にどのような環境にあっても不変でなければならず、それには第一に「行為者自身の美的質の自由な発展と一致」すること、第二に「まさに行動という観念のうちに想定される、外界が行為者に及ぼす反作用によって、究極的にはかき乱されるようにはならない」(5. 136) ことが不可欠の条件だと言うのである。一見してこれらの二つの条件はカテゴリーの第一性 (美的質)、第二性 (行動) に関する規定であることがわかる。二つの条件は逆に言えば、美的質の発展と行動が最高善に収斂するということであり、情感 (第一性) の習慣 (第三性) と行動 (第二性) の習慣が確立することを意味する。これが恐らくはパースが内的実現、外的実現で表現した事柄であると思われる。だからこそ第一性や第二性が第三性 (思考、法則、習慣等) によって支配されていく過程、つまりは「世界の合理化 (rationalization of the universe)」(1. 590)、あるいは「理性の展開 (development of Reason)」(1. 615) が最高善とされるのであろう。

このような世界の合理化が最高善として要請される論理展開を、实在論およびアプダクションという別の角度からみたとき、最高善は探究の究極目標としての究極的真理あるいは究極的实在の要請という形で登場した。規範学論でも第三性の要素の浸透、理性の支配として最高善を考えているとすれば、なぜ論理学でなく美学が最高善に係わるのかを改めて問い直してみなければならない。これについてはパー

スが第一性の第三性を扱うという解答を与えているのを既にみたが、それでも第一性に係る事実が変わりない。プラグマティズムを科学的な探究という概念の徹底的な適用とする観点に立てば、パースの言う「美的質」は探究の目的の達成に伴う満足 (satisfaction) をより客観的な基礎の上に確立する試みと解しうる。前期の探究理論では、探究の目的は疑いによる動揺した不満足な状態を、信念の確立した満足した状態に変えることであると規定された。これを心理学的な意味にとれば、個人的満足感が真理と等置されることになる。それ故パースは行動がその目的に合致したときの満足を主観的な満足感でなく、真理に付随する「満足性の性質」(5. 558) として考えるために、その手掛りを美学に求めたものと思われる。⁽¹³⁾ 美的享受は確かに一定の情感だが、美的鑑賞眼の成熟につれその情感はより客観的なものに収斂していくからである。その理想的極限の美的享受は真理と呼ばれる資格をもつであろう。こうしてパースにおいて、真理は行動がその行動の目的と一致するという意味で善の一種とされ、その善が達成されたときには、真の満足を与える美的享受が成立するという思考の流れが存在したものと推定される。それ故最高善は本来的には連続的な探究の究極目標に達成したとき実現される一つの美的全体であるが、パースにとって究極目標は前もって規定しえず探究過程において実現されていくものであり、その実現を促進する探究行動がそれぞれ満足性の性質を備えている。

6

最高善に関しては、パースに実質的な美学説がないこと、及び最高善の概念の大枠である宇宙論にこの稿では触れる余裕がなかったこともあり、十分にその概念を把握できたとは言えないが、プラグマティズムと最高善の関係については、ほぼ明らかにしえたと思う。プラグマティズムは、知的な概念の意味を目的をもつ行動の記述によって明晰化しようとしたことから、長期的な行動において追求されるべき究極目標としての最高善の問題に行きあった。そして最高善を世界の合理化の過程と規定し、前期においてプラグマティズムの格率が第三段階目の明晰さを与えるとされていたのが、最高善との係わりで世界の合理化を発展させるかどうかが第四段階の明晰さの規準として立てられるようになる。つまり「概念の意味はいかなる個別的な反作用にあるのかも決してなく、それらの反作用がその発展に寄与する仕方にある」(5.3)。このような後期の最高善によるプラグマティズムの基礎づけのも

つ意味は、条件的な予測を確立する探究概念を、思考を明晰にするために徹底的に適用していく過程で、それ自身は前もって規定できないけれども方法論的に要請せざるをえない前提が確認されたということであろう。それは形而上学的前提⁽¹⁴⁾だがパースの意味では、経験を超越しているのではなく探究の終極において実証される前提なのである。

このようにパースにおけるプラグマティズムと最高善の関係を考察することは、探究概念を軸にした哲学、形而上学の再編がプラグマティズムの根本的立場であることを浮き彫りにする。ただしここでの探究は実際の科学的探究からの類推による拡張であり、思考過程そのものが記号を媒介とした探究として捉えられる。探究の概念が基礎にある点で、パースの立場は絶対的観念論ではなく記号主義的な条件的観念論といえよう。しかもそこに实在論をも包摂しようとした独自の立場を打ち出す。従って、ここではプラグマティズムと实在論およびその根底にある最高善の概念に考察を限ったが、パースの哲学全体を理解するには、例えば一つの記号としての人間が連続的な探究過程の一部となり、巨大な論証としての宇宙につながるといった形而上学まで含む、記号主義的観念論を検討する必要がある。つまりプラグマティズムと实在論および観念論を統一的に把握することを要求されるが、これは次の課題として残しておく。

〔注〕

- (1) グージはこの二つの傾向を naturalism と transcendentalism として、膊分け作業を行なっている。Goudge, T.A. *The Thought of C.S. Peirce*, University of Toronto Press, 1950.
- (2) Buchler, J. *Charles Peirce's Empiricism*, Octagon Books, 1939, P.154
- (3) パース哲学の時期区分については、Murphey が4時期に分けているが、ここでは焦点をプラグマティズムに限定し、一般的に認められているように “The Fixation of Belief” (1877), “How to Make Our Ideas Clear” (1878), を中心とする前期理論, “Lectures on Pragmatism” (1903) を中心とする後期理論という大雑把な見方をとっておく。
cf. Murphey, M.G. *The Development of Peirce's Philosophy*, Cam-

bridge, Mass.: Harvard University Press, 1961.

- (4) パースからの引用は, Hartshorne, Charles, Paul Weiss, and Arthur Burks (eds.), *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, 8 vols. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1931~58. の巻数と節数を記入する。
- (5) White, M. *The Age of Analysis*, George Brajiller, Inc. New York, 1957, p.178
- (6) Buchler, J., *op. cit.*, p.123
- (7) このような試みの例としては, Boler, J.F. *Charles Peirce and Scholastic Realism*, U. of Washington Press, Seattle, 1963.
- (8) パースのカテゴリー論は彼の哲学全体の基層にあり, 思惟の基本的枠組を提供する極めて重要な理論である。カテゴリー論の展開過程を簡単に辿っておくと, パースはまずカント研究の成果から質 (Quality), 関係 (Relation), 表示 (Representation) の三つのカテゴリーを導出し, さらに関係論理学の一項性 (monad), 二項性 (dyad), 三項性 (triad) の概念の分析によりカテゴリーが三つに限られることを確認した。そして後期では現象学的方法によって現象の普遍的構成要素としてのカテゴリーを導出した。この後期への移行は, 前期では意識形態をすべて記号として解釈する観念論の要素が濃厚であったのが, 实在論の徹底化に伴いカテゴリーが経験の様式のみならず Being の様式ともされ, 観念論と实在論の統合が企てられたためと考えられる。従ってパースの現象学には知られているもの (現象) から知られうるもの (存在) への志向性が認められる。
- (9) パースにおいては知覚 (perception) も第二性として位置づけられ, 個別的知覚そのものは一定の質 (第一性) と認知を強いる圧力としての反作用 (第二性) を有するかもしれぬが, 知識の対象とたるためには知覚自体を表象する知覚判断 (perceptual judgment) によらなければならない。個別的な知覚が第三性の媒介によって一般化された知識の事項となるときに, 实在性の問題が生ずる。
- (10) プラグマティズムが最終的にアブダクションの論理と規定された背景には, パースが論理学において名辭, 命題, 論証の絶対的な区別を認めなかったこと

も関係していると考えられる。パースは名辞を「— は硬い」という形式で理解し、— に論理的主語を代入して初めて命題となるがそれ自身は不完全な命題であると考えている。また「ダイヤモンドは硬い」という命題は現実の事実を指示するが、その命題が一般的に真であるための根拠となる論証を含まず、その限りで命題は不完全な論証にすぎない。こうしてパースは「名辞が未発達な命題であるのとほぼ同じ意味で、命題が今度は未発達な論証なのである」(2. 344)と言う。つまり名辞のみ命題のみを取り上げても、真の意味の確定はできず、最終的には論証に訴えなければならない。ここに概念の明晰化の方法であったプラグマティズムが、論証の一形式たるアプダクションの論理とされるようになった理由の一端が見出せる。

- (11) パースの規範学については、 Vincent, G.P. *Charles S. Peirce On Norms & Ideals*, U. of Massachusetts Press, 1967. がある。
- (12) パースは通常の意味に近づけて習慣を理解する場合は、それが自己統制によって改善されていく面に注目し、多くは条件的な予測の知識を一般的行動に態勢化したものとして習慣を使用している。しかも習慣を無機物にまであてはめ自然法則さえも習慣とみている。
- (13) プラグマティズムのまとまった美学説としては、
Dewey, J. *Art as Experience*, Minton, Balchand Co., New York, 1934. があり、そこでデューイは満足という主観的意味に解されやすい概念のかわりに、探究の結果としての完成した経験 (consummatory experience) の概念を基礎にして美学説を展開している。
- (14) これまで最高善の概念をパースの形而上学的傾向として論じてきたが、厳密には規範学の枠内で最高善は要請され、規範学に原理を依存する形而上学はそれを実在の様式として前提する。

(たかみ やすのり 博士後期課程 2 回生)